

## “手袋”に関する文献と稀観書

司書2課（参考係）佐藤 俊子

手袋は、防寒用、礼装用のほか作業用にも使われ、英語のグラブ (glove)、ミトン (mitten)、フランス語のガン (gant) にあたる。gloveの語源については議論の余地があるものの、アングロサクソン語のグロフ glof (てのひら) からきたものとされている。グラブは通常グラブズ (gloves) と複数で呼ぶことが多い。手袋には大別して5本の指が別々に分かれているグラブと、親指と他の4本とが分かれているミトンとの2種がある。

手袋の最古の遺物は、エジプトの王家の谷から出土したツタンカーメン王の綴織りの手袋で、古代エジプト18王朝末のものとされ、素材には亜麻が使用されていた。元來手袋を用いる目的は、手を保護することにあつたので、男性の手袋はスポーツ用が起源（古代ローマ出土・B.C.150頃）であつたが、古代エジプトやローマの婦人達は、食事の時にやけどや手の汚れから護るためにも用いた。中世の人々は、今日のミトンに似たようなものは付けていたが、上流階級のスポーツとしての鷹狩りが行われるようになると、鷹を左手にのせるための皮製手袋が作られた。中世では、騎士や僧侶の叙位の役割や市民権保持者への諸特権のしるしとして象徴的な役割を果たした。長手袋は、決闘の挑戦として敵の面前に投げつけられ、赤い布製の華やかな飾りがついた手袋は、神聖ローマ帝国の徽章のひとつになった。また、槍試合や戦場で騎士が使う籠手も手袋の一種であつた。婦人用の手袋は男性に贈る愛のしるしとして用いられた。

グラブについての記録は11世紀まで見られない。17世紀は手袋の華やかな最盛期で、18世紀に入ると、手袋は廃れはじめ、男性用は形も簡単なものになったが、婦人用は社交用に欠かせないものと

なり、19世紀には丈も色々に変化した。20世紀には、工業化の発展により、素材、デザインに富んだ手袋が広い階層に普及した。

1) S. W. Beck 著 *Gloves, their annals and associations*. (383.4-B) 『手袋の歴史のおよび関連記述』は1883年にロンドンで刊行された。内容は手袋の語源、歴史（古代）、聖職者・国王・裁判官・鷹狩り用手袋、籠手、芳香で満たされた手袋……などを歴史的に、誓約・しるし・贈物・好意としての手袋を象徴的に捕えて記述されている。

2) L. O. Uzanne 著 *The sunshade, the glove—the muff*. 1883 (383.4-U) 『日傘、手袋、マフ』

本書はロンドンで刊行され、パラソル、手袋、扇をはじめ19世紀フランスのファッション、香水



エリザベス I 世の金の房飾りと飾りひもで刺繍した白い子羊皮の籠手風手袋

美容に関する多くの著作を残したフランスの社会風俗研究家であるユーザヌ（1852—1931）の記述による。内容は日傘；パラソル—雨傘、手袋；ミトン、マフ；毛皮についての歴史、風俗が解説され、挿絵は P. Avril により、単色で描かれている。本書の仏語版 *L'ombrelle, le gant, le manchon*.

〔383.4-U〕も同年、パリで刊行された。英語版がグリーン系のハードカバーの単色挿絵に対し、仏語版はソフトカバーで色刷りの異った挿絵が描かれている。この他にユーザヌ著、*Les ornements de la femme; l'éventail—l'ombrelle—le gant le manchon*. 1892, Paris. 〔383.4-U〕『女性の装飾品；扇、傘、手袋、マフ』がある。

3) W. B. Redfern 著 *Royal and historic gloves and shoes*. 〔383.4-R〕『王家の歴史上有名な手袋と靴』は1904年にロンドンで刊行された。本書はヴィクトリア&アルバート美術館の手袋の写真、ロンドンのニュー・ギャラリーで展示されたスチュアート朝の遺物から撮られた写真を除いては、できる限り写真に収めた現存する品々の図版や著者自身が綿密に描いた水彩画などの多数の図版から選んだ79枚（手袋47枚、靴32枚）を載せるとともに、あらゆる事実に関しては正確さに努めた手袋と靴についての歴史書である。14世紀、英国のウィンチェスター校の創立者、William of Wykeham（1324—1404）司教の手袋から、18世紀、ピンク系の刺繍で飾られた薄い黄色の絹織りの婦人用一對のミトンまで数々の王家の手袋が集められている。

4) Max von Boehn 著 *Modes and manners ; ornaments*. 〔383.13-B-3〕『流行と風俗；装飾品』は1929年にロンドンとトロントの J. M. デント社とニューヨークの E. P. ダットン社から刊行された英語訳（初版）の補巻である。元版 *Die Mode ; Menschen und Moden*. 8v. （1907—1925）1920—1963『流行；人間と流行』〔383.13-B-1~8〕については本館発行の『文化女子大学図書館所蔵西洋服飾関係欧文文献解題・目録』p.96~97に載せて

ある。補巻はこの他、アメリカのベンジャミン・プロム社から（1970年発行の再版もある）、スペイン語版 *Accesorios de la moda* の書名で、バルセロナから1944年（本館所蔵は1950年発行の2版）に刊行された。内容は「装飾品—レース・扇・手袋・散歩用のつえ・パラソル・宝石・装身具」で257の図版を載せ、手袋はp.68~93に収録されている。

5) K. M. Lester 著 *Accessories of dress*. 1940 〔383.3-L〕『衣服の装飾品』本書は、頭部に付ける装飾品、首、肩、腰部に付ける装飾品、足、脚に付ける装飾品、腕、手に付ける装飾品、手で持ち歩く装飾品、衣装に使われる装飾品の6章に分け、手袋は第4章に記述されている。

6) V. Cumming 著 *Gloves*. 1982 〔383.4-C〕『手袋』本書では、皮製手袋、布製手袋、編み手袋の製造、17世紀の豪華な刺繍手袋、18世紀の形の単純化、19世紀の装身具用と社交用、20世紀の略式への発展の各章に分けて記述している。

7) F. Le Reste 著 *Le gant*. 1984 〔383.4-L〕『手袋』本書は、30×16cmの変形本で、原寸大の手袋の図版（モノクロ）も載せた歴史書である。

8) C. Cella 著 *La mano, il guanto*. 〔383.4-C〕『手とその手袋』は1989年にミラノで刊行された Piccoli Piaceri シリーズの1冊で、手袋の歴史と製造について記述している。このシリーズで他にも、「社交服」「靴」「ネクタイ」「靴下」に関する資料がある。

9) 手袋に関する製造、技術書としては、B. E. Ellis 著 *Gloves and glove trade*. 1921 〔589.249-E〕

『手袋と手袋産業』、I. M. Edwards 著 *Practical glove making*. 1929 〔589.249-E〕『実用的な手袋の作り方』、*The story of the fabric glove industry of Great Britain*. 〔1949〕〔589.249-S〕『イギリスの布製手袋工業物語』、G. Emlyn-Jones 著 *Make your own gloves*. 1974 〔584.249-E〕『手袋の作り方』、福島令子著『手袋大好き』（1988 山海堂）〔589.249-F〕などがある。